

日本人の美意識に関する基礎的研究

「美」の概念としての「あいまい」に関する研究

Fundamental research about the Japanese beauty consciousness

Research on "Aimai" as a concept of the beauty

高橋 浩伸 / 九州芸術工科大学大学院 大井尚行 / 九州大学

TAKAHASHI Hironobu/Kyushu Institute of Design, Oi Naoyuki/Kyushu Univ.

Key Words: "Aimai", Beauty, Concept, Japanese people, Subjective evaluation

要約

現代の我々日本人の美意識とはいうと、混沌として、何が「美」で、何が「醜」かの区別さえも難しい状況にある。このような混沌とした現代において、新たな「美」の概念を見だし、一つの方向性を示すことは、大いに意義のあることと考える。そこで、その新たな概念として、本論では「あいまい」という概念を提起し、「あいまい」という概念が、「美」の概念であることを実証することを本論の目的とする。そこでその方法として以下の2つの方法で検証を行った。

(1) 「あいまい」という「美」の概念を、既存の日本的な「美」の概念である、「わびさび」「幽玄」等の概念に見出す。

(2) SD法を用いた印象評価実験にて「あいまい」が美の概念であることを確認し、更に「あいまい」が美の概念概念の階層構造においてどのような位置づけにあるのかを検討する。

上記のような方法によって、2章においては、「あいまい」という概念が「美」の概念として、「わびさび」や「幽玄」といった日本的「美」の概念の中に見いだせた。

さらに3章においては、「あいまい」が、美の概念であることを確認できた。

この「あいまい」という美の概念の存在が確認出来たことで、混沌とする現代の日本人の美意識に対して、新たな一つの方向性が示せたものと考えられる。

今後は、これまで個人的な感性の違いとして、うやむやにされていた美意識を、現代の日本人の「地域」や「年齢」等による影響を明らかにし、「美しい景観」や、「美しいサイン」の創造のための基礎研究としていきたい。

1 - 1 . はじめに

近年まで、哲学や思想の分野でしか語られなかった「美」への探求が、今日、神経科学、心理学等の科学的なアプローチが試みられている。何か美しいものを創造し、自分自身や自分を取り囲む廻りの世界を意味あるものになりたいという欲求は、人間の普遍的性質であって、歴史を貫き、あらゆる文化を横断して人類を結びつけている¹⁾と言える。

地域や風土、文化や歴史等によりそれぞれ違った美意識を持つ人類において、「日本人の美意識」を研究することは、日本人の好みに合った都市景観や、サイン計画、それに様々な創作デザインにおける「うつくしいもの」の創造に寄与出来るものと考えられる。その基礎的資料として、日本人の美の概念について考察する。

1 - 2 . 研究の背景

著者らは既報(2003)²⁾において、日本の伝統的建築空間を対象とした場合の日本人の美意識が、オズグッド [C.E.Osgood] の言う「評価性 (evaluation)」「力量性 (potency)」「活動性 (activity)」の3つに集約されず、日本人の特徴的な美の概念である「わびさび」や「幽玄」、「余白を感じる」等の概念は、これら3つとは別の因子として抽出されたことから、日本人の美意識の多様性や特徴を述べた。

本研究の背景には、筆者らの日本人の美意識を究明することで、巷に溢れる決して美しいといえないものを少なくし、「うつくしいもの」の創造に寄与したいという意志が存在する。

一般に日本人の美の概念としては、「わびさび」や「幽玄」、「いき」等が知られている³⁾。これらは、中世以降に成立したものであり、それ以前の「美」の概念としては、汚れないものを指して言う「きよし」や清らかなるものを指す「キヨラ(清)」などがあげられる。

一方、西欧の美の概念としては、古代ギリ

リシャからの「比例 (proportion)」や「均衡 (balance)」や「調和 (harmony)」「対称 (symmetry)」などから、ルネッサンスやバロックに至っては、それまで美的対象として省みられなかった自然美に対しての、「崇高 (the sublime, das Erhabene)」や、文芸における、「悲壮 (das Tragische)」、「滑稽 (das Komische)」、「フモール^(注1)」等があげられる⁴⁾。そしてさらに、写実主義の風潮に従って、「醜の美学」を主張するものも現れ、「美」の対極の「醜」までもある意味では積極的意義を有するものとされている⁴⁾。このように見てくると、洋の東西を問わず、「美」の概念とは時代とともに変化し、より多様化していることが解る。さらに21世紀の今日においては、何が「美」で、何が「醜」かの区別さえも難しく、「醜」と思われるものまでを「美」と言ってしまうことに、現代の美の概念の混迷を感じるのである。

1 - 3 . 研究の目的

このように混迷した現代の美の概念において、今後の進むべき美の方向性を示すことは、大いに意義のあることと考える。すなわち、進むべき美の方向性を示すことで、巷に煩雑する決して美しいと言えないデザインを少なくし、「うつくしいもの」の創造に寄与できると考えるからである。それには、現代の日本人の美意識における、新たな美の概念を見出し、今後のデザインの分野における一つの方向性を示す必要がある。その新たな美の概念の一つの手がかりとして、ドナルド・キーン『日本人の美意識⁵⁾』がある。キーンは、日本人の美意識として「暗示または余情」や「いびつさ、ないし不規則性」、「簡潔」、それに「ほろびやすさ」などをあげている。その中でも、日本人の美意識の特徴として、「暗示・余情」を生じさせる日本語の「あいまい」性を述べている。ただ彼は、「暗示・余情」を日本人の美意識の特徴的な美の概念としているが、「あいまい」に関しては、「暗示・余

情」を生じさせる要素としてしか取り上げていない。

そこで、著者らは、この「あいまい」という概念に注目し、この概念こそ現代日本人の美意識として、デザインの分野における今後の方向性を示すことができる、新たな美の概念であると考え。この「あいまい」という概念は、我々日本人の国民性や文化面等に多く見られる特徴である⁶⁾が、この概念が、過去、美の概念として直接用いられた例は見いだせなかった。

したがって、本研究において「あいまい」という概念が、美の概念として日本人の今後の進むべき美の方向性を示す重要な概念であることを確認し、「うつくしいもの」の創造に寄与することを本研究の目的とする。

1 - 4 . 「あいまい」の定義

「あいまい」という概念は、近年の科学技術の分野における、ファジィ(あいまい)理論などに見られるように、大変注目された概念でもある。そこには“余裕”や“遊び”やといった意味合いが含まれるのであろうが、同じような意味での「あいまい」は、日本人の服飾文化^(注2)や思想^(注3)にも見いだせる。また一方、国際社会において批判的な意味での、日本人の民族性を「あいまい」と表現したり⁶⁾、日本人の話す日本語も「あいまい」な言語だと言われている⁷⁾。

『広辞苑(第5版)⁸⁾にて「あいまい」の意味を調べると、「確かでないこと。まぎらわしく、はっきりしないこと。」とある。すなわち不明確、不明瞭なもの・ことを指すと考えられる。この「あいまい」という言葉は、古くは11世紀に見いだせるが^(注4)、言葉の意味は今日とあまり違わない。それ以前には『王朝語辞典⁹⁾にも見いだせない。また『角川古語大辞典第1巻¹⁰⁾によれば、“漢語”とあり、『大漢語林¹¹⁾にて「曖昧(あいまい)」の意味を見てみると、「はっきりしないこと。あやふやなこと。」とある。したがって、11世紀前後に日本に伝えられた言葉であると考えられる。

逆に時代を下って、『江戸語大辞典¹²⁾』『江戸語辞典¹³⁾を見てみると、「あいまい」の語は見いだせない。しかし19世紀に書かれた『文明論之概略¹⁴⁾には現在と同じような意味の「曖昧(あいまい)」が見いだせる。また同じく19世紀の『西国立国志¹⁵⁾には、曖昧(あいまい)を“うすぐらき”と読むこともあったが、意味としては、現在と違わない。

また、『新和英大辞典(第4版)¹⁶⁾によれば、英語における日本語の「あいまい」

は、vagueness:あいまいさ、ambiguity:多義性、obscurity:不明瞭とある。また、このほかに、uncertain:不確かな、不定の、変わりやすい、ともある¹⁷⁾。したがって本論では「あいまい」という概念を、「不明確、不明瞭、多義的、不定的、流動的」なもの・ことを指すと定義する。

1 - 5 . 日本人の既存の「美」の概念

高階¹⁸⁾によれば、日本語で言う「美しい」という言葉が、今日の我々が使っているような意味を持つようになったのは、おおむね室町時代以降だという。

上代(およそ奈良時代まで)においてはひらがなでの「うつくしい」という言葉が、親しい人への愛情や、小さいもの、可憐なものに対する愛情を表す言葉であり、やがて美的性質一般を意味するものに昇華していったということは、日本人の美意識が、自分より小さいもの、弱いもの、保護してやらなければならないものに対して向けられていた¹⁸⁾といえる。また、上代の人々は美しいものを「きよし」と呼んでいた¹⁸⁾。上代の日本人の「美」を表す概念は、クハシ(細)、キヨラ(清)、ウツクシ(細小)、キレイ(清潔)と変化しており、清なるもの、潔なるもの、細かなるものに同調していた¹⁸⁾と考えられている。

中古(平安時代)には、「みやび」や「をかし」、「なまめかし」等の「美」の概念が成立する。そして中世(鎌倉・室町時代)には、「わび・さび」や「幽玄」といった「美」の概念が成立する。

近世(江戸時代)には、「いき」等の「美」の概念が成立する。さらに近代(明治以降)になると、これまでの日本人の「美」の概念と異なる、西欧的な「比例(proportion)」や「調和(harmony)」や「対称(symmetry)」「均衡(balance)」といった「美」に、多くの人の目が向けられた。しかし、逆に欧米人たちによる、日本の「美」の再発見がなされ、その中でブルーノ・タウト¹⁹⁾は日本芸術の特徴として、「単純さ」という概念をあげ、伊勢神宮や桂離宮を絶賛している。またドナルド・キーン⁵⁾は、日本人の美意識として「暗示または余情」や「いびつさ、ないし不規則性」、「簡潔」、それに「ほろびやすさ」などの「美」の概念をあげている。

1 - 6 . 「美」の概念における

階層構造(仮説)

現在の認知心理学においては、我々は日常ごく当たり前のこととして、外界の事象に対して、カテゴリー化を行っている²⁰⁾。カテゴリー化することで外界の状況を記憶

したり、他との区別を行うが、そのカテゴリー化には、いくつかのレベルがある。例えば“学校のいす”も“社長のいす”も“いす”である、というもカテゴリー化だが、同時に“いす”も“机”も“家具”であるというもカテゴリー化である。つまり“学校のいす”は“いす”であり、“いす”は“家具”である、というように、カテゴリー化は階層的につながっている²⁰⁾。

ロッシュら(Rosch, Mervis, Gray, Johnson, & Boyer-Braem)²⁰⁾によれば、外界の構造をよく反映し、さらに認知的にも最も情報がゆたかに効率よくとらえられる概念のレベルを「基礎レベル(basic level)」と呼び、例えば“いす”はこの基礎レベルの概念に当たり、“いす”を含む“家具”は、「上位

表 - 1 美の概念における階層構造(仮説)

上位レベル	基礎レベル	下位レベル
美	日本の美	わびさび 幽玄 いき 暗示・余情 不規則性 ほろびやすさ 簡潔 … あいまい
	西欧的美	proportion (比例) balance (均衡) harmony (調和) symmetry (対称) …
	アジア的美	…
	アフリカ的美	…
	その他	…

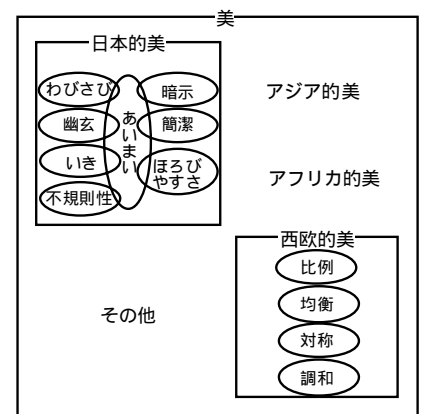


図 - 1 美の概念におけるダイアグラム(仮説)

レベル(superordinate level)」に当たる。また“いす”に含まれる“学校のいす”は、「下位レベル(subordinate level)」の概念に当たる。この概念の階層構造に日本人の「美」の概念を表現するとき用いられる言葉を当てはめてみると、仮説として(表-1)のようになると考えられる。

この仮説においては、基礎レベルには、「日本の美」や「西欧的美」が位置し、下位レベルに「わびさび」「幽玄」等が考えられる。さらにここでは「わびさび」「幽玄」等と同じ下位レベルに「あいまい」を位置づけている。また、「わびさび」「幽玄」等の日本の伝統的な美の概念と「あいまい」との概念図を仮定すると、(図-1)のようになると考えられる。

2. 既存の日本の美的概念と「あいまい」
この章においては、「あいまい」が美的概念であることを確認するために、既存の日本の美的概念である「わびさび」や「幽玄」等の概念に「あいまい(不明確、不明瞭、多義的、不定的、流動的)」という概念を見出していく。

2-1. 「わびさび」と「あいまい」

室町時代に定着したとされる「わび」「さび」であるが、吉岡²¹⁾によると、「わび」とは形に残らない主観的なものを言い、心や精神の在り方を指す。また「さび」は言行における現れ方を規定、客観的に形に残るものとしている。そしてこの両者は一体化をなしてこそ生成するとしている。このように「わび」「さび」は別々の意味を持つ、個別の概念であるが、一体化をなしてこそ、この概念の意味が生まれると考え、本論では「わびさび」として扱う。

『広辞苑(第5版)』に「わびさび」の語はなく、「わび」「さび」のそれぞれの意味を見てみると、「わび」とは、飾りやおごりを捨てたひっそりとした枯淡な味わい。「さび」とは、古びて趣のあること⁸⁾とある。したがって「わびさび」とは、飾りの無い清楚で簡素な古びた趣のことと考えられる。その意味するところの飾りの無い簡素さは、空白・余白を意味し、それは見るものに無限の美を想像させ「多義的」で「不明確、不明瞭」と言える。この「多義的、不明確、不明瞭」こそ、すなわち「あいまい」であり、「わびさび」の概念に「あいまい」という概念が見いだせる。

2-2. 「幽玄」と「あいまい」

「わびさび」と同時代の室町時代の芸術を貫いていた美的概念に「幽玄」がある。

日本の芸術史の中で「幽玄」は、平安時代中期の歌人、壬生忠岑がはじめて提唱し

た理念であった²²⁾。その後は、和歌における美のテーマとして伝えられ、室町時代になって幅広い芸術観として確立した。そして、幽玄をもっとも高度に論理化し、自らの芸術の中で実践してみせたのが、室町時代の能の大成者・世阿弥であった²²⁾。

幽玄とは、余情を楽しむ芸術的「美」の概念と言える。すなわち「幽玄」とは、今、眼の前にある姿・形のみしさだけを楽しむのではなく、そこに隠された姿の意味や美しさを想像することで、感動に深みを与えること²²⁾と言える。世阿弥の記した『風姿花伝』²³⁾にも「秘する花を知る事。秘すれば花なり、秘せずば花なるべからず、となり。」とある。すなわち「幽玄」とは隠されたもの、秘するものがあるこそ、美を生み出すということが言える。したがって「幽玄」という概念には、秘するもの、すなわち「不明確、不明瞭」なものが重要な「美」の要素として存在しているということになる。このように「幽玄」という概念にも「不明確、不明瞭」すなわち「あいまい」という「美」の概念が見いだせる。

2-3. 「いき」と「あいまい」

日本の色彩文化の中に、「四十八茶百鼠」²⁴⁾という言葉がある。この言葉からもわかるように、我々日本人は古くから鼠色や茶色を愛してきた。

室町時代には禅などの影響もあり、水墨画では「黒は五色を兼ねる」²⁵⁾といわれ、黒を薄めた色の濃淡によって微妙な表現を持つ鼠色は、芸術の分野などで美しい色として認識されていた。江戸時代中期以後になると、庶民は赤や紫などの派手な色は禁じられ、茶系統・鼠系統・藍色系統に限られていたので、流行色もその中に限られた。九鬼²⁶⁾は当時の「いきな色」として、鼠系統では、深川鼠・銀鼠・藍鼠・漆鼠・紅掛鼠などをあげている。

このように「いき」な色とされる鼠色は、「不明確、不明瞭」「多義的」な感覚をイメージさせる。したがって「いき」という概念にも「不明確、不明瞭、多義的」すなわち「あいまい」な概念が見いだせる。

2-4. 「暗示」と「あいまい」

ドナルド・キーンは、日本人の美的概念として、「暗示、余情」をあげている⁵⁾。この「暗示」は「美」の概念としては、水墨画などでの余白の「美」と言われるものに見られる。(写真-1参照)

「唯紙上に一物もなき所こそ為し難し」^{注5)}という池大雅の有名な言葉があるが、これは日本の絵画において、余白がいかに重要視され、余白による「暗示」の難しさや、



写真-1
「余白の美」

水墨画：「枯木鳴鴉図」宮本武蔵作



写真-2 「暗示の空間」
竜安寺石庭

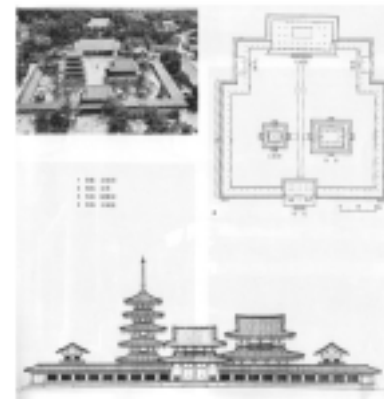


写真-3 「不規則性(左右非対称)」
法隆寺配置図・立面図及び鳥瞰写真

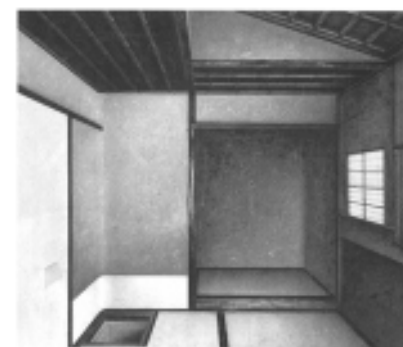


写真-4 「不規則性(左右非対称)」
茶室内部(妙喜庵待庵)

その「暗示」による「美」の表し方の困難さを物語っている²⁷⁾。このように「暗示」における「不明確・不明瞭」な部分に日本人は「無限の美」を創造してきたと言える。

また暗示の空間で一般に知られているのが、石庭で有名な竜安寺の庭園があげられる。竜安寺石庭は、大海に散在する島を象徴していると言われている²⁸⁾。しかし、はっきりした作者の意図は依然謎のままである。竜安寺の庭園に関する解釈は、現在まで人により、時代によりさまざまであったが、過去においてそうであったように、現代においても定説というものはない²⁸⁾。しかし竜安寺の石庭は常に名園とうたわれ、常に人びとの関心の対象となり、長年人々の心をうち続けてきたのである。(写真 - 2)したがって「暗示」にも「不明確、不明瞭」すなわち「あいまい」という「美」の概念が見いだせる。

2 - 5 . 「不規則性 (左右非対称)」と

「あいまい」

日本の伝統的建築は、古来より大陸の影響を強く受け、特に寺院建築においては、初期より左右対称性が強く、金堂、塔、中門が一直線に並んだり、塔を中心にして金堂が左右に配されたりしているが、法隆寺においては、形態の異なる塔と金堂を左右に置き、しかもその均衡を微妙に保つ距離や大きさのバランスの良さで配置されている。(写真 - 3)これは大陸にも例が見られず、日本独自のものといわれている²⁹⁾。このような左右非対称な配置は、日本を代表する建築物の桂離宮の配置にもみられるが、神代³⁰⁾によれば、中世の半ば頃からは一般の住居でも、特に住生活とかかわって、一つの建築、一つの屋根の下に、諸機能を集め合わせる傾向が現れ、外部にむかって本体から一部が突出したり、あるいは本体の片側に折れ違った部分が付加したりして、空間の左右非対称化が始まったとされる。

また茶室にもこの「不規則性」が見いだせる。茶道における茶室の設えでは、常に重複を避け、部屋の装飾に使う品々は、色彩やデザインが重複しないものが選ばれる。生花があれば、花の絵は許されない。丸い釜を用いるのなら、水指は角のものが使われる。また床の間に花器や香炉を置く場合は、真中に置かない。これは空間を真半分に分けてしまうからである。床柱は、部屋の単調を破るため、部屋の他の柱と異なる材種の木を用いる³¹⁾。(写真 - 4)

このように茶道文化における茶室の空間は、対称や重複を避け、わざと均斉を崩し、

そのアンバランスな「不定的・流動的」な感覚、すなわち「あいまい」の中に「美」を見いだしてきたといえる。

このように、左右非対称な「不規則性」にも「不定的・流動的」すなわち「あいまい」という概念が見いだせる。

2 - 6 . 「ほろびやすさ」と「あいまい」

日本の伝統的建築は、決して永久的ではない木材で造られ、やがては朽ちてしまう建物を、つねに新陳代謝して、つねに新しく、永遠に生きながらえんとしてきた。20年あるいは21年ごとに同一の形式のまま建て替えられる伊勢神宮の式年御造営はその代表的なものである。それは常に新陳代謝を繰り返す、滅び、再生を繰り返すのである。我々日本人は古来より、「ほろび」を見越して建物を建てたのである⁵⁾。また和歌などに見られる、この「ほろびやすさ」という概念は、ドナルド・キーンが、「日本人は、このほろびなくしては、美もあり得ないということ、敏感に意識していた。⁵⁾」というように、日本人の美意識における重要な「美」の概念であり、その意味するところは、普遍的ではなく「流動的」で、すなわち「あいまい」といえる。このように「ほろびやすさ」にも「あいまい」という概念が見いだせる。

3 . 実験 - S D法による日本の伝統的空間における印象評価実験

3 - 1 . 実験の目的

ここまで、「わびさび」や「幽玄」「いき」

等に、「あいまい」の概念を見出し、「あいまい」が美の概念であることを検討してきたが、この章では、SD法を用いた印象評価実験によって、「あいまい」が美の概念であることを確認し、更に日本人の美意識の究明の基礎資料とすることを目的として、

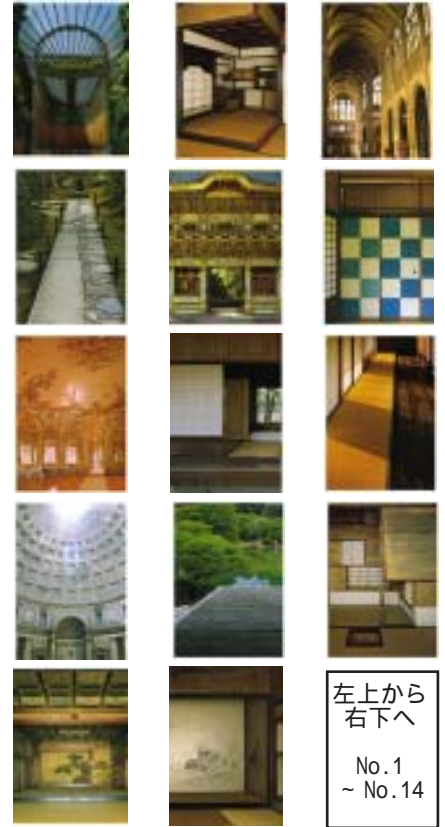


写真 - 5 評価サンプル

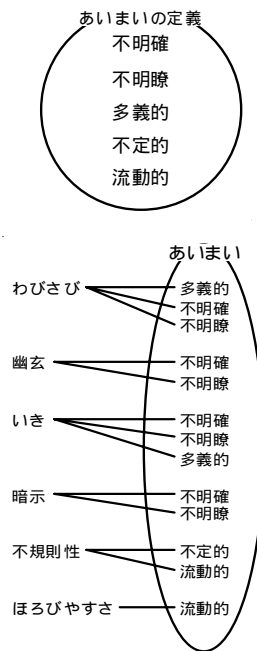


図 - 2

あいまいの定義と既存の日本の美的概念との関係図

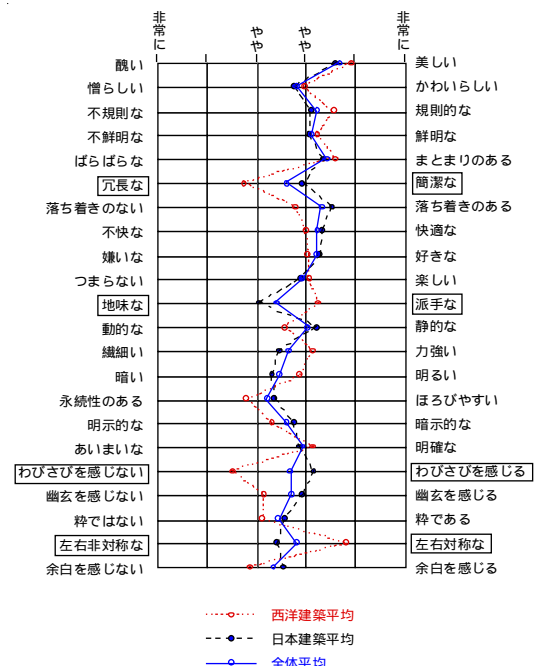


図 - 3 評価結果の平均によるプロフィール

「あいまい」がロッシュ²⁰⁾のいう階層構造においてどのような位置づけにあるのかを検討する。

3 - 2 . 実験の概要

この実験では、サンプルとして、日本の伝統的建築として代表的な「桂離宮」において、日本的美の美しいとされる要素（縁側、庭園、床の間、茶室、路地等）を含んだものと、「桂離宮」には見られない、対極の美とされる、豪華な装飾を施した日本の伝統的建築として、日光東照宮陽名門や二条城の大広間等を加え10枚用意し、比較検討用として、西欧建築における美しいとされる要素（全面装飾、垂直性、天窓等）を含んだものを4枚用意し、計14枚で実験を行った。（写真 - 5）

それらを22尺度6段階のSD法で印象評価するものとした。被験者は20～30代の男性7名女性9名の計16名で、学生や一般の社会人である。なお被験者には、写真に写った建築空間において、自分がその場所に、実際に一人で存在していると仮定してもらって、評価を行った。

3 - 3 . 実験結果と考察

各評定結果を数値化し、その平均を取ったプロフィール（図 - 2 参照）を見てみると、日本建築と西洋建築において、「簡潔な - 冗長な」や「派手な - 地味な」それに「わびさびを感じる - わびさびを感じない」、「左右対称な - 左右非対称な」などで評価の違いが見られた。これらは、一般に言われている日本建築と西欧建築の特徴的な違いと合致する結果が得られた。

次に各尺度の被験者平均値を用いて、主因子法、バリマックス回転にて因子分析を行った。データ解析にはStat View Version5.0 (Macintosh版)を用いた。その結果、因子負荷量は(表 - 2)のようになった。

共通因子は8つ抽出され、第1因子には、「好きな」、「快適な」、「美しい」、「かわいらしい」、「楽しい」などの項目を含んでおり、『美しさ』と命名した。第2因子には、「派手な」、「静的な」、「簡潔な」、「明るい」などの項目を含んでおり、『安定』と命名した。更に第3因子には、「規則的な」、「左右対称な」、「まとまりのある」などが含まれており、『調和』と命名した。同じように第4因子には、「粋である」、「幽玄を感じる」、「わびさびを感じる」などが含まれており、『情趣』と命名した。また、第5因子には、「あいまい」、「暗示的な」、「繊細な」などが含まれており、『あいまい』と命名した。

回転前の固有値1以上の共通因子は第5因子までであるが、第5因子までの累積寄

与率は61.94%となり、これら5つの因子ではすべてを解釈することはできない。そして第6・第7・第8因子は、それぞれ1つずつの尺度のみを含んでいるが、回転後には、因子寄与が1を越えていることを考えると、これら第6・第7・第8因子も特徴的な因子と考えられ、日本人の美意識の重要な概念であると考えられる。

これらの結果を基に、日本的美の概念の階層構造を示すと(表 - 3)のようになる。またそのダイアグラムを示すと(図 - 3)のようになると考えられる。

3 - 4 . 実験の結論

今回のこの実験では、「あいまい」は「暗示」や「繊細」とともに一つの共通因子を抽出できた。このことは、「あいまい」が「暗示」や「繊細」と強い相関を持ち、美の概念として評価項目として機能した事を示しており、「あいまい」が美の概念であることを確認できた。

また「わびさび」や「幽玄」「いき」から、『あいまい』とは別の因子として『情趣』と命名した共通因子を抽出できた。この2つの因子は独立しており、「あいまい」と「わびさび」「幽玄」「いき」「暗示」「不規則性」「ほろびやすさ」の相関はほとんど見られなかった。このことは、一見2章に反するようであるが、「わびさび」「幽玄」等に「あいまい」の定義である「不明確・不明瞭」等が見出されたとしても、この他にもいるような要因も含まれており、別々の概念として成立するものと考えられる。

更に『あいまい』が因子として抽出されたことで、概念の階層構造においては、「わびさび」「幽玄」よりも上位に位置し、『あいまい』が「わびさび」等よりも、より広範な意味を有する概念であると言える。

4 . 本論のまとめ

本論では、今日の美の概念における混迷の中、一つの方向性を示す意味での、新たな美の概念としての「あいまい」を提起し、その美の概念としての確認が出来た。この「あいまい」という概念は、西欧などでは、白黒はっきりしないなどと批判的でもあるが、一方で東洋的な中庸の思想などから、一部西欧でも見直されている概念である。このように見てくると、「あいまい」という美の概念は、今後のデザインの分野における、一つの重要なキーワードとなりうるものであると考えられる。

今後は、これまで個人的な感性の違いとして、うやむやにされていた美意識を、現代の日本人の「地域」や「年齢」、「性別」等による影響を明らかにしていくことで、

「うつくしいもの」の創造のための基礎研究としていきたい。

尚、本論文は、2003年度(第43回)日本建築学会九州支部研究報告発表会において、発表したものを基に、その後の知見を加え、加筆・訂正を施したものである。

【注記】

注1: フォーモル(humor): おかしみ、ユーモア(を解すること)

注2: 和服や風呂敷、草履等に見られるようなおおまかなサイズによる、あいまいな文化。参考文献: 古庄敏行: 日本はなぜあいまい文化なのか, 廣済堂書店, 1997

注3: 西欧の科学中心の思想に対し日本(東洋)思想はあいまいな思想と呼ばれる。参考文献: 藤井康男: 21世紀の曖昧論, 佼成出版社, 1997

注4: 「本朝文粹」(藤原明衡編)に「況在二曖昧之中一、思二瑩弘之道」というのがある。参考文献: 日本国語大辞典1, 小学館日本大辞典刊行会, 1986, P47

注5: 桑山玉州「絵事鄙言」1799: 参考文献, 井上充夫: 日本建築の空間, 鹿島出版会, 1995

【参考文献】

- 1) イグ・レチテ バラ・レツバ・ガ・デ・レ・ド・ス・イ(野口薫, 宇阪直行訳): 美を脳から考える, 榊新曜社, 2000
- 2) 高橋浩伸・大井尚行: 現代日本人の美の概念に関する研究, 日本建築学会大会学術講演梗概集(東海)D-1環境工学, P851-852, 2003.9
- 3) 久鬼周造: いきの構造, 岩波文庫, 2001
- 4) 竹内敏雄: 美学総覧, 弘文堂, 1979
- 5) ドナルド・キム(金関寿夫訳): 日本人の美意識, 中公文庫, 1999
- 6) 古庄敏行: 日本はなぜあいまい文化なのか, 廣済堂書店, 1997
- 7) 賀やすし他: あいまい語辞典, 東京堂出版, 2001
- 8) 新村出編: 広辞苑第5版, 岩波書店, 1999
- 9) 秋山虔編: 王朝語辞典, 東京大学出版会, 2000
- 10) 中村幸彦他編: 角川古語大辞典第1巻, 角川書店, 1982
- 11) 蒲田正・米山寅太郎編: 大漢語林, 大修館書店, 1992
- 12) 前田勇: 江戸語大辞典, 講談社, 1974
- 13) 大久保忠国・木下和子編: 江戸語辞典, 明文社, 1991
- 14) 渡辺 敏郎編: 文明論の概略: 日本国語大辞典1, 小学館日本大辞典刊行会, 1986
- 15) ギョウ・スル(中村正直訳): 「西国万国志」: 日本国語大辞典1, 小学館日本大辞典刊行会, 1986
- 16) 渡辺 敏郎編: 新和英大辞典第5版, 朝倉書店, 1974
- 17) 三省堂編修所編: デイ・コクイ和英辞典第4版, 三省堂, 1991
- 18) 高階秀爾: 日本近代の美意識, 青土社, 1993
- 19) アル・カ(森脇郎訳): 日本文化私論, 講談社学術文庫, 1999
- 20) 市川伸一・伊藤裕司編: 認知心理学を知る プレソ出版, 1991
- 21) 吉岡徹: 生活造形的美意識, 家政教育社, 1998
- 22) 長尾剛: 日本が解る思想入門, 新潮文庫, 2000
- 23) 世阿弥(上豊一郎他校訂): 風姿花伝, 岩波文庫, 1993
- 24) 吉岡幸雄: 日本の色事典, 紫紅社, 2000
- 25) 西陣グラフィック, 西陣織工業組合, 1999年8月号
- 26) 久鬼周造: いきの構造, 岩波文庫, 2001
- 27) 井上充夫: 日本建築の空間, 鹿島出版会, 1995
- 28) 伊藤ていじ: 日本デザイン論, 鹿島出版会, 1999
- 29) 東孝光: 日本人の建築空間, 彰国社, 1990
- 30) 神代雄一郎: 間(ま)・日本建築の意匠, 鹿島出版会, 1999
- 31) 岡倉覚三(ソントン不破直子訳): Kakuzo Okakura. The Holy Scripture of Tea, 1906(茶の本) 社会思想社, 1995

写真 - 3: 「日本建築史図集」彰国社日本建築学会編 1994 P9

写真 - 4: 「数寄屋の森」丸善 中川猛監修 1995 P15

表 - 2 因子負荷量

尺度	凡例	美しさ (評価性)	安定 (活動性)	調和	情趣	あいまい	余白	ほろびやすさ	鮮明さ	共通性
		因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	因子7	因子8	
嫌いな - 好きな	好	0.849	0.284	-0.055	0.192	0.011	0.049	-0.161	0.106	0.88
不快な - 快適な	快	0.825	0.329	-0.050	0.132	-0.011	0.036	-0.145	0.132	0.85
醜い - 美しい	美	0.747	-0.076	0.009	0.102	-0.031	0.134	-0.246	0.275	0.73
憎らしい - かわいらしい	か	0.745	-0.029	0.148	-0.078	-0.232	-0.226	0.009	-0.195	0.73
つまらない - 楽しい	楽	0.726	-0.178	0.054	0.199	0.269	0.214	0.190	-0.005	0.76
地味な - 派手な	派	0.072	0.792	-0.203	0.139	-0.316	0.080	-0.011	-0.040	0.80
動的な - 静的な	静	0.004	0.767	0.017	0.113	-0.128	0.248	-0.114	0.071	0.70
冗長な - 簡潔な	簡	0.276	0.766	0.043	0.121	0.097	-0.186	0.234	-0.167	0.81
落ち着きのない - 落ち着きのある	落	0.545	0.641	-0.140	0.239	-0.127	0.062	-0.143	0.149	0.85
暗い - 明るい	明	-0.293	0.483	0.006	0.032	-0.510	0.162	-0.147	-0.311	0.72
不規則な - 規則的な	規	-0.040	0.006	0.852	-0.001	0.193	0.046	-0.113	0.129	0.80
左右非対称な - 左右対称な	左	-0.011	-0.226	0.794	-0.112	0.077	-0.161	0.001	0.011	0.73
ばらばらな - まとまりのある	ま	0.244	0.279	0.526	0.060	-0.137	0.030	-0.110	0.542	0.74
粹でない - 粹である	粹	0.214	0.081	0.119	0.824	0.131	-0.063	0.044	-0.190	0.80
幽玄を感じない - 幽玄を感じる	幽	0.133	0.161	-0.091	0.767	-0.207	0.083	-0.260	0.089	0.77
わびさびを感じない - わびさびを感じる	わ	0.129	0.305	-0.320	0.633	-0.343	0.101	0.056	0.208	0.79
あいまいな - 明確な	確	-0.019	0.019	0.249	-0.049	0.802	0.004	-0.072	0.198	0.75
明示的な - 暗示的な	暗	-0.039	-0.231	0.045	-0.108	0.724	-0.324	0.002	0.063	0.70
繊細な - 力強い	力	-0.187	-0.256	0.217	-0.116	0.599	0.382	-0.220	-0.192	0.75
余白を感じない - 余白を感じる	余	0.215	0.292	-0.174	0.055	-0.255	0.699	0.122	-0.003	0.73
持続性のある - ほろびやすい	ほ	-0.322	-0.021	-0.148	-0.134	-0.091	0.080	0.831	0.018	0.85
不鮮明な - 鮮明な	鮮	0.235	-0.231	0.262	-0.062	0.385	-0.066	0.080	0.628	0.73
因子寄与		3.889	3.186	2.083	1.952	2.517	1.051	1.117	1.168	16.96
因子寄与率		17.68%	14.48%	9.47%	8.87%	11.44%	4.78%	5.08%	5.31%	77.11%
累積寄与率		17.68%	32.16%	41.63%	50.50%	61.94%	66.72%	71.80%	77.11%	

表 - 3 美の概念における階層構造
(実験結果)

上位レベル	基礎レベル	下位レベル
日本の美	美しさ (評価性)	好き 快適 楽しい
	安定 (活動性)	静的 落ち着き 簡潔
	調和	規則的 左右対称 まとまりのある
	情趣	わびさび 幽玄 いき
	あいまい	暗示 繊細
	余白	余白
	ほろびやすさ	ほろびやすさ

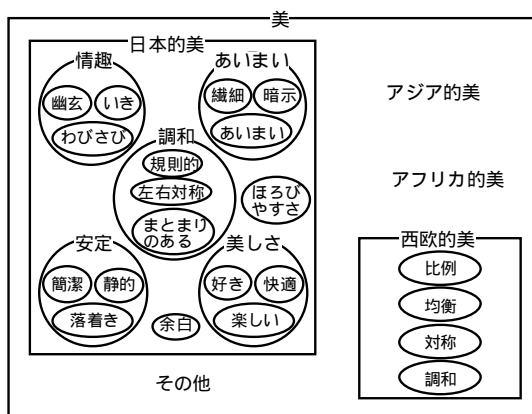


図 - 4 美の概念におけるダイアグラム
(実験結果)